

## V. 学生懸賞論文実施報告

応募論文 29 編のうち入賞論文は以下の 5 編です。

### 大学院生

1 等 (賞金20万円)	該当論文なし
2 等 (賞金10万円)	該当論文なし
3 等 (賞金 6万円)	該当論文なし
佳作 (賞金 2万円)	該当論文なし

### 学部生

#### 1等 (賞金20万円)

庄司真人 (4年) 「日本における金融教育の養成と普及」に関する考察

#### 2等 (賞金10万円)

太田あすか (4年) 中心市街地活性化を担う「チャレンジショップ」事業の成功要因－札幌市「タヌたまプラザ」と富山市「フリークポケット」を事例として－

前田容子 (代表)  
藤田琴代  
稲船綾夏  
本館綾香 (3年) ブライダル業界の行方

#### 3等 (賞金 6万円)

千明哲郎 (代表)  
往蔵亮太  
藤澤仁志 (3年) サッカーワールドカップビジネス－国内産業への影響－

#### 佳作 (賞金 2万円)

小川 亮 (代表)  
大澤 翼  
高田禎久  
吉田健太朗 (3年) 札幌ドームの経営戦略

## 総 評

小樽商科大学ビジネス創造センター研究部

主任(平成 17 年度) 大津 晶

平成 17 年度の学生懸賞論文には 19 編の応募がありました。昨年は 26 編でしたので応募総数では一昨年以前の水準に戻ったとも言えますが、大学院生の部への応募が例年 1 編のところ 3 編に増加しています。応募論文を厳正に審査した結果、学部生の部で 1 等 1 編, 2 等 2 編, 3 等 1 編, 佳作 1 編を入選論文として選出し、大学院生の部では残念ながらすべての賞に該当なしという結論を得ました。

応募者の所属内訳を見ますと、商学 10 編, 経済学 5 編, 企業法学 3 編, 社会情報学 1 編となっており、例年よりも商学科への偏りが大きいように思われます。したがって応募論文の分野も経営やマーケティング, 企業戦略論などが目立つ結果となりました。また著者が 3 年生の論文が比較的高い評価を得た点も今年度の特徴と言えます。

応募論文に対する審査員の評価を概観すると、着眼点の良さやテーマ設定のおもしろさ, 独自に実施した調査などを高く評価するものが多い一方で、既往研究のレビュー不足や結論にいたる論理構成の弱さが指摘され、分析手法の妥当性への疑問が示されています。ひとことで言うならば“著者の信念を熱く語るあまり、やや独善的になってしまった”論文が多かったということでしょう。また例年指摘されていますが、論文の形式上の問題や誤字・脱字, 規定分量の大幅な超過など、応募論文としての完成度が低いことにより、せっかく著者独自の視点や主張に光るものがありながら、総合評価を下げてしまっている面もあるようです。

入選した各論文は、いずれも複数の審査員から「優れている」との評価を得たものです。大学院生の部で入選がなかったのは、審査員全体の考え方として、「原則として 1 年生でも応募できる学部生の部は、なるべく良いところを評価しよう」とし、「大学院生が書く論文はやはり内容・完成度ともに一定程度の水準を期待したい」という暗黙の基準があるのかもしれない、結果的に厳しめの評価になったのではないかと考えられます。

今後学生懸賞論文に応募しようとする諸君には、独創的な着眼を大事にしつつも学術論文の作法を守って、質の高い論文を執筆していただきたいと思います。今回応募がなかった 2 年生以下の学生についても、早い段階で懸賞論文に応募することで良い論文の書き方を学ぶことができますので、来年度以降の意欲的な応募を望みます。

最後になりましたが、本懸賞論文事業の実施にあたり、株式会社北洋銀行様より多大なるご支援をいただきました。記して謝意を表します。

## 各論文講評

### 学部生の部

#### 1等

##### 庄司真人（4年） 「日本における金融教育の養成と普及」に関する考察

本論文は、近年著しく変化している金融環境において、消費者に求められる金融リテラシーおよびそれを養成する金融教育の普及について論じたものである。

「2005年は金融教育スタートの年」などと言われており、激変する日本の経済・金融環境と個人のライフサイクルにおいて、「時代がそれを求めている」と考えられる金融リテラシーの養成を論文のテーマとして設定した点について高く評価することができる。また日本の個人金融資産が間接金融部門に偏在し過ぎているとの問題意識、今後、急速にその運用が直接金融部門を通じて行なわれるであろうという時代変遷の意識も的確と認められる。具体的な論旨の展開においては、日本と各国の現状比較に基づき、金融リテラシーの必要性和株主の社会的責任能力について述べ、最後に金融教育普及の具体案を述べているのは、論文形式、アプローチとして優れていると言える。また論理展開が明確であり、論文の記述形式も適切な点も評価された。

敢えて改善点を指摘するならば、全体を通じて定性的な記述が多く、提言内容の効果分析や、現状維持の場合の問題の大きさ等に関する定量的分析がないため、読み手を全面的に納得させ得ない結果となっていること、金融教育の主たる担い手として地方金融機関が最適であるとした提案の妥当性にさらなる吟味が必要であることなどが挙げられるが、本論文により学生の側から、基礎教育段階でも金融に関する教育を義務化すべきとの提言がなされた事は多とすべきである。さらに、独自の追加ヒヤリング調査等も行われれば、他人の研究・情報と自分の行ったことが区分され、論文の独自性と付加価値がより高まった。

#### 2等

##### 太田あすか（4年） 中心市街地活性化を担う「チャレンジショップ」事業の成功要因－札幌市「タヌたまプラザ」と富山市「フリークポケット」を事例として－

本論文は、大きな社会問題である地方中心市街地の衰退を食い止める施策として近年注目されているチャレンジショップを題材とし、チャレンジショップ事業の成否に影響を及ぼす要因を取り上げて、成功事例と苦戦している事例を比較検討することによって、その要因間の関係を明確にしようとした意欲的な論文である。

冒頭に示された「チャレンジショップの成否に影響を及ぼす要因間の関係」のイメージ図は、厚みのある議論が展開できる可能性が高い分析フレームワークと言える。また実地調査をして具体的発言を引き出し、これに基づく事例の検証を行った点は、一定の新事実発見につながっており高く評価できる。論文形式としては、文章や論理構成がしっかりしており主張点も明確である。

一方で、論題にあるように「中心市街地活性化を担う」という点を重要視するのであれば、「チャレンジショップ事業」が「空き店舗対策事業」や「中心市街地活性化」とどの

ような関係があるかについてもっと整理されるべきであったろう。また先行する研究や関連文献のサーベイが不十分であるため、事例の紹介にとどまっているように感じられる点が残念である。空き店舗対策の一つとしてのチャレンジショップ事業が商店街問題の解消や中心市街地活性化にどれぐらいの効果があるのかについてさらに突っ込んでいただければ、内容的に充実した論文になると思われる。

## 2 等

前田容子 (代表)      ブライダル業界の行方  
藤田琴代  
稲船綾夏  
本館綾香 (3年)

本論文は、マーケティングの分野ではあまり一般的でなく先行する学術的研究が少ないブライダル業界に注目して分析を行った意欲作である。

まず、結婚式に対するニーズの変化やブライダル業界の市場規模の変化を時系列に追いつながらきちんと整理している点、第二に、そういった現状認識に基づいて研究課題を取り出している点、第三に、本格的なケーススタディーに入る準備段階としてアンケート調査を行っている点、第四に、そのアンケート調査の結果から2社を取り出してインタビュー調査を行っている点などは、研究目的を達成するための望ましい分析プロセスであろう。特にブライダル業界、とりわけ挙式・披露宴市場の事業形態としての「ゲストハウスウェディング」方式と「ホテルウェディング」方式のそれぞれのマーケティング戦略を比較分析し、厳しい競争状況の中でより顧客ニーズに対応できる戦略を模索しようとする気持ちは十分伝わるものとなっている。

一方で、本稿のテーマと関連する研究蓄積が少ないことから、関連文献を十分検討していないため、議論が展開されていないように感じられる点が気になる。また分析対象として取り上げる範囲が広すぎるので、ブライダル業界の現状認識に止まっていると受け取られる可能性が高い。比較の範囲をマーケティング戦略の中の一つ、二つに絞って構成していれば、より厚みのある論文になると思われる。インタビュー調査については、調査結果はきちんと整理されてはいるものの、その後の分析作業が必ずしも十分とは言えない。顧客獲得競争に勝ち残るための新しい戦略を提案することが目的であろうから、それぞれのマーケティング戦略の評価基準をきちんと定めて比較分析を行えば、読みやすく、内容的にも充実した論文になると思われる。

## 3 等

千明哲郎 (代表)      サッカーワールドカップビジネスー国内産業への影響ー  
往蔵亮太  
藤澤仁志 (3年)

本論文は、世界的なスポーツイベントであるサッカーワールドカップによって活況が予想される3つの業界に注目してそれぞれの業界の動向を分析したものである。

本論文が取り上げたテーマは話題性のあるものなので、読者は内容に関して想像しやすいわけだが、実際に論文もその想像を違えないものとなっている。論述の形式においても、

要約からまとめまで理解しやすくまとめられている点が評価できる。ワールドカップがもたらす様々な経済効果を多面的に分析・考察した点が優れており、ビール業界内における各社の収益にシフトが見られていることを示している点は読者の興味を惹くものである。

しかしながら、日本はワールドカップ開催国も経験し、既にビックビジネスとして成り立っているため本テーマがオリジナリティの高いテーマとはいえないし、3業種に絞り込んだ理由・背景が十分に記述されていないので、その背景を説明する必要がある。未開拓な業種や業種を絞って掘り下げて研究するとオリジナリティが高まると考えられる。また分析の方法として文献調査が主となっているが、どこまでが文献の参照で、どこからが私見なのかがわかりにくい点が気になった。文献については学術的なものを引用すると内容の深みが増すであろう。

## 佳作

小川 亮 (代表)      札幌ドームの経営戦略  
大澤 翼  
高田 禎久  
吉田健太郎 (3年)

本論文は、札幌ドームの経営環境の分析と他地域のドーム球場との比較を通じて、札幌ドームの長期的な経営戦略を提言することを目的にしている。

まず、地元の札幌ドームの経営改善提案というテーマを設定し、現状で黒字経営ではあるものの、地元の大型ドームを更に活発化すべきという観点はオリジナリティがあるといえる。斬新な提案の中身は学生のアイデアとして高く評価されて良いが、全般にわたり論理的な叙述が不足しているため、いわゆる論文というよりも、企業経営活発化の為の提案集という体裁になってしまっている。具体的には、問題点の絞り方、提案が得られる過程、提案の有効性や妥当性に関するさらなる検討が必要ということになる。分析の方法については、実際の利用者に対するインタビュー、アンケート等を実施することで、提案のリアリティが増すと考えられる。また、利用されている資料の大部分がホームページであるが、三セク経営、スポーツマネジメント、顧客満足度経営など提案を考察する上で有用な文献を利用することが可能であったのではないかと。

前述のように、学術論文として評価するといくつかの問題点を指摘せざるを得ないが、著者の熱意が伝わる文体で記述されている点および提案の独創性など、読者に訴える点も決して少なくない論文である。

## 審査員 (五十音順)

穴沢 眞	海老名 誠	大沼 宏	大矢 繁夫	小田 福男	梶原 武久
金 鎔基	齋藤 由起	坂柳 明	柴山 千里	下川 哲央	瀬戸 篤
高田 聡	高宮城 朝則	寺坂 崇宏	遠山 純弘	中川 喜直	中浜 隆
中村 竜哉	沼澤 政信	白 貞壬	前田 東岐	横田 宏治	

